

### 似た者夫婦と似ていない神と

(創世記一八・九〜一五)

「似合い似合いの釜の蓋」「合わぬ蓋あれば合う蓋あり」そして「破れ鍋に綴じ蓋」。これらは皆主に夫婦の相性に関する諺だ。意味は御承知のとおりであるが、「日本語と日本文化で遊ぶ笑える国語百科辞典」というサイトに興味深い解説が載っていた。曰く『破れ鍋に綴じ蓋』のように相性がいいと他人から見える夫婦であっても、当の本人たちは相手を破れ鍋や綴じ蓋のように欠点のあるものと見ながらも自分の破れ鍋あるいは綴じ蓋ぶりに関しては決して認めないということがまある。これは大問題である」なるほど秀逸なコメントである。

さて今朝の個所はアブラハムの妻、サライに関する記事であるが、ここに出てくる彼女の姿はやはり先ほど挙げた諺の通りである。以下アブラハムの妻サラの姿に迫ってみたい。

#### 一、自己卑下をするサラ

九十九歳になったアブラハムのもとに突然三人の旅人がやってきた。アブラハムは彼らを見るや、すぐにひれ伏し、彼らをもてなし、その準備を妻サラに頼んだ。その宴席の最中、旅人の一人が、先にアブラハムに神が語ったのと同じメッセージ、即ち一年後に妻サラが子どもを産むということをアブラハムに告げたのである。サラはそれを天幕の中で聞いたのであるが、彼女はそれを受け入れなかった。寧ろ十二節に「老いぼれて(直訳：ぼろ布のようになって)しまったこの私に何の楽しみがあるろう。」と嗤いながら呟いたのである。ここにある種の自己卑下を感じない人はいないだろう。彼女は自分に絶望していたのだ。恰もアブラハムがかつて「自分は奴隷に家督を譲らねばならない(参・一五・三二)」と言ったように。

#### 二、約束を嗤うサラ

聖書にはサラが自己卑下的な発言と共に心の中で笑ったことが書かれている(一二節)。しかし笑いにも色々な種類がある。彼女の心の中にあつた笑いとは一体何だろうか。神の約束に希望を見いだして微笑んだのだろうか。否である。では神の言葉の真実を待ち切れずに喜び、笑ったのか。これまた否である。答えは簡単、そう彼女はアブラハムに与えられた神の約束を嗤った、言い換えれば嘲笑し、冷笑したのだ。これは悪い笑いである。確かに彼女は

年若い、生物学的に妊娠することが不可能になっていたから、こうした反応はある意味自然ではある。そしてこれはアブラハムにおいても同様であつた。彼もまた前章において「百歳の者にこどもが生まれようか」と言つて嗤つたからである(創一八・一七)。全くもつて「似た者夫婦」なのだ。

#### 三、嘘をつくサラ

その時である。三人のうちの一人がアブラハムに言った。そしてその一人は主ご自身であつた。主はサラが嗤つたことに疑問を持たれ、そしてアブラハムに「主に不可能なことがあるうか」と言った。確かにアブラハムと契約を結ばれた神は創造の神にしていのちの神。文字通り「超」自然のお方である。そう考えるならば、人間の側の常識を神は越えることが出来るのは神としては当然のことである。その時サラは天幕から出てきて、旅人に扮した主に對して「私は笑いませんでした」と言つて打ち消した。その理由は一言、「恐ろしかったから」とあるのみ。神への恐怖のゆえに嘘をつく。矛盾しているようであるが、失樂園の物語が示すようにこれぞ罪ある人間の典型である。要は見えずいたうそをついて、その場を取り繕おうとしたのである。だがこのような場しのぎの嘘をつくことは彼女の夫であるアブラハムの

「得意技」でもあつたのだ。(参考：創一・一三、二〇・二)

\* \* \*

このように見ていくと、アブラハムとサラは正に「似た者夫婦」、「似合い似合いの釜の蓋」である。彼ら二人は共に神の約束を信じることができずに自己卑下に陥り、神の約束を嗤い、しまいには見えずいた嘘をつくといった「欠け」のある人間であつた。実に彼らこそ「ザ・リアル・破れ鍋に綴じ蓋」である。しかしながら、このアブラハム、そしてサラと契約を結ばれた神はどうだろう。神は彼らに似ているだろうか？ 答えは当然に「否」。むしろ私たちの創造の神、主はこの夫婦のもつあらゆるネガティブをポジティブなものに打ちかえて下さる、罪ある人間とは全く隔たつた真実なお方なのだ。

「いや、確かにあなたは笑つた」サラのシニカルな嗤いを主は見逃さなかつたが、だからといってご自身が結んだ約束を反故にはされなかつた。そして時が満ち、約束の子イサクが生まれた一年後、サラはこう言った。「神はわたしを笑わせて下さつた。(創二二・六・口語訳・NIV)」。神を嗤い、自らをさげすんだサラの心に真の笑いを取り戻させて下さるお方、この方こそ私達の神である。アーメン。